

かの文豪、園田修三郎は晩年を宮古島で過
ごした。彼は著作の中で、次のように述べて
いる。曰く、東京は刺激を与えられる場所で
あるが、宮古島はあらゆるものを吸い取って
くれる場所である。慧眼だ。来島者は宮古の
自然の中で日々の不平不満、ストレスを発散
し、来たときよりも心を軽くして笑顔で帰っ
ていく。もう一度この感覚を味わいたい。がた
めにリピーターになるものも多い。事実、来
島者の数は年々、右肩上がりである。
それでは、島が吸い取った来島者のストレ
スはいったいどうなっているのか。そのまま
放っておけば、彼らのストレスはビーチの汀^{みぎわ}
を犯し、白い砂は手垢がついたように黒ずみ、
波の洗う岩場を滑りやすくさせる。海底に沈
んだそれは珊瑚を白化させ、鮮やかであるは
ずの海中を砂漠のように変えてしまう。木々
の枝に引っかかったそれらは生命力の溢れる
緑の葉を枯らし、ミヤコニイニイも声を失う
だろう。誤ってウミガメが飲み込めばどうな

つてしまおうか、言うまでもない。
だから僕たちは今日もストレスを拾って
る。
作業服の袖を捲り、頭に巻いたタオルで汗
を拭いながら、僕たちは毎日せつせとストレ
スを拾う。ストレスは大方の想像通り黒い塊
で、たいていは掌くらいの大きさである。そ
れは吐き出されてすぐの段階ではまだしっか
りとしたかたちを持たない。拾っても指の隙
間からぬるりと落ちてしまいうから、僕たちは
その段階ではまだ手を出せない。拾えるよう
になるには吐き出されてから少なくとも一日
経ち、表面が乾いて持ちやすくなつてからだ。
このタコ焼きみたいな状態になつてから拾い
上げると、中でまだ固まりきつていないスト
レスがとぷんと揺れる。砂川のオジイくらい
になると、その音でストレスの内容までわか
つてしまふのだけれど、僕にはまだ無理だ。

早くそうなればと思う。
その日も僕は砂川のオジイとともに砂浜で
ストレスを拾っていた。島の東側にあるその
ビーチは、まだ夏休み前だというのに観光客
で溢れかえっていた。小さな子どもたちが歓
声をあげて波と戯れ、それを母親が日焼けを
気にしながら見守っている。あっちでは生ま
れたときからかけていたのではないかと思う
ほどサングラスの似合う外国人が、ビーチベ
ッドで読書をしている。社員旅行なのか、中
年の男性たちがビールを飲みながら笑いつ
ている。僕は彼らの間に落ちているストレス
をひとつずつ拾って歩く。子どもが投げたビ
ーチボールが僕の足元に転がってきて、その
まま僕の足をすり抜けて波にさらわれていつ
た。僕たちの姿は彼らには見えない。彼らが
僕たちの世界に触れることもできなければ、
僕たちが彼らの世界に触れることもできない。
次元が違えばその世界を認知できないと言わ

れているけれど、僕には難しいことはわからない。それでも僕は子どもには笑いかけ、彼らが踏まないようストレスを手早く拾う。僕が笑いかけるには理由があつて、本当にごく稀にだけれど、僕たちの姿が見える子どもがいるのだ。特に赤ちゃんが虚空を不思議そうに見つめているとき、たいていは僕たちの姿が見えていると思つていい。

砂川のオジイが戻つてきて、僕の引つ張るカゴに、拾つたストレスをガラガラと放り込んだ。カラカラに乾燥したストレスは黒曜石のように陽を照り返し、僕の目をちくりと刺した。

「しかし暑いなあ。なんだよ、まだ終わつてないのか。日が暮れちまうぞ」

砂川のオジイはまだ中天にある太陽を指さし言った。

「不公平だ。こっちとそっちじゃ全然違う」

僕は自分に割り当てられたエリアを振り返つた。観光客がたくさんいて、それだけに落

ちているストレスも多い。オジイの担当エリ
アは広くはあるけれど、人気なんてない。
「俺にもっと働けっていうのか。年寄りは大
事にしろよ」
そう言いながら砂川のオジイは呵々と笑っ
た。そうすると、皺の中まで陽に灼けたオジ
イはさたぱんびんみたいに見える。
「そういえばおもしろいもん拾ったぞ。これ
な」と砂川のオジイはまだ手に持っていたス
トレスを耳元で振った。「浮気がバレたらし
い。奥さんと浮気相手との間で進退窮まった
って感じだ。それでよくこんなところでのん
きに海に入ってたよな」
そして、壮介も気をつけろよ、と笑った。
「そんなので悩んでみたいよ。俺なんて彼女
もないのに」
僕も笑いながら、適当にカゴから拾い上げ
たストレスを耳のそばで振ってみた。とぷと
ぷと音がするだけで内容などちつともわから
ない。いったい砂川のオジイの耳にはどうや

つて聞こえているのだろう。以前にそのコツ
を尋ねたとき、砂川のオジイはある日突然聞
こえるようになると言った。何千、何万回と
聞くうちに急に聞こえるようになるのだ、と。
同時に、わかったっていいことなんか何もね
えぞ、とも言った。確かに他人のストレスな
んて聞いてもどうなるものでもないのだけれ
ど、聞こえるはずのものが僕には聞こえない
となる、まだまだ半人前だと言われている
ようになんとなく口惜しい。
「ここらはやつとくから、お前は、ほれ」砂
川のオジイは遠い記憶を探しているような顔
で海を見やった。「中を拾ってこい」
僕はずくと、マスクと足ひれをつけて
海に潜っていった。まずはカクレクマノミの
いるあたりを探してみる。そこは人気のシユ
ノーケリングスポットで、今も何人かが浮か
んでいる。僕はいちおう彼らの邪魔にならな
いように気をつかいながら、海底に沈んだ黒
い塊を拾って網袋に入れていく。ぷにとし

た感触に驚くと、それはナマコだった。砂川のオジイに見られなくてよかった。まだ見分けがつかないのかと笑われるにきまつている。潮の流れに乗って拡がってしまいうストレスを注意深く探しながら、僕は青の中を泳いでいく。フエダイの黄色い群れが散って集まり、鮮やかなイラブチャーが貝を食べるゴツゴツという石を叩くような音が聞こえ、波紋のつくる砂底の光の網目模様を眺めていると、僕は仕事を忘れそうになる。意識がとろけて海と一体になったように感じる。その瞬間が、僕は好きだ。

焼却場の話をしよう。

それは地下ダムの近くのサトウキビ畑の裏の外れのずっと奥にある。島中から集められる。たストレスはそこでごうごうと燃やされる。火は古来、すべてを浄化するといわれている。けれども、ストレスも例外ではない。僕は一度だけ人手が足りないからと焼却場に派遣され

たことがあるのだけれど、冬にも関わらず汗
だくになつた。一日中ストレスを火にくべる
から腕は上がらなくなるし、腰はバキバキに
なつた。僕はもう二度とやりたくないと思つ
たけれど、そこで働いている人たちはけっこ
う楽しそうだった。筋骨隆々の男たちが冗談
を言いながら働いている様は、まるで産業革
命の時代のイギリスみたいだった。見たこと
ないけれど。どういう仕組みかわからないけれど、燃や
した後に残る灰はとても良質な肥料になる。
元気のなくなつた木の根元に撒くと、すぐに
その木は生氣を取り戻し、早送りをしている
かのようになぐんぐん成長する。建設中のホテ
ルなんかには植えられてすぐのデイゴやガジュ
マルの根元にほんの少し撒くだけで、それら
の根張りがよくなる。僕たちの仕事で人間の
世界に干渉できるとしたら、そうやって灰を
撒いて植物を成長させるくらいだ。でも僕は
それが嬉しくて、ハイビスカスやアラマンダ

の種を常に持ち歩き、気が向いたときに適当な場所でそれらを咲かせたりする。そのくらいだったら砂川のオジイもうるさいことは言わない。もしなぜこんなところにブーゲンビリアが、と不思議に思うなら、それはきっと僕の仕業だ。喜んでもらえるなら嬉しい。毎日飽きもせず僕たちはストレスを拾う。特に夏場は拾っても拾ってもストレスは減らない。中でも砂山ビーチなんかは大変だ。僕たちが拾っているすぐ後ろで、若い女性たちのグループがそれぞれに「わあ」とか「きれいな」とか言いながら口から黒い塊をポトポト落とす。ほとんどホラー映画だ。彼女たちがひと通り写真を撮って満足して帰ると、今度は家族連れがやってきてまた「すごい」とポトポト。ときどき自分が虚しい作業をしているのである。穴を掘ってそれを埋める作業に近い。でも僕たちは御嶽で生まれ御嶽に還るまで、ストレスを浄化する

ことだけを使命として存在している。ある意味マモルくんといっしょだ。でもマモルくんはみんなに愛されているけれど、僕たちのことは誰も知らない。キジムナーより無名。誰よりも島の美しさを守っているのに、誰にも感謝されない。別に感謝してほしいわけでもないのだけれど、それにしたってもう少し何にかあってもいいのではないだろうか。たとえば観光協会の作った広報用映像のエンドロールに名前が載るとか。そんなことを考えるとき、僕は砂川のオジイを見る。僕が生まれるずっと前からストレスを拾い続けているオジイに刻まれた皺を、よく灼けた筋張った腕を見る。そうすると僕は自分が正しいことをしているという確信めいたものを抱くことができるのだ。「何だよ、人の顔じつと見やがって」「いや、格好いいなと思って」「冗談じゃねえよ。お前にモテたっしょうがねえ」砂川のオジイは苦い顔をすする。

「そんなんじゃないよ。ただ、オジイみたい
な年のとり方をしたいなっと思っ。あ、照れ
た」
「照れてねえよ。だいたいな、壮介。お前は
俺をこれっぽっちも敬ってねえ」
そんなことはないのだけれど、こうなると
砂川のオジイは自分の言いたいことを言っ
しまわなければ気が済まない。僕はニヤニヤ
しながらオジイの小言を聞く。でも僕のその
表情を見るとオジイはいっそう顔を赤くして
口から泡を飛ばす。まるで子どもだ。
「俺が最初に組んだのは、平良のオバアだっ
た。オバアは口より先に手が出るタイプだっ
た。そりゃひどいもんだったぞ。オバアが若
い頃はハジチと行って、女性は両手に入れ墨
をするのが普通だった。オバアの両手にもよ
くわからんが指の先まで模様が入っていたよ。
その立派な手でよく叩かれたもんだ。どうい
うコツがあるんだか、音はしないでとにかく
痛い。今でもたまに夢に見る」

僕はまたはじまったと思う。もう何度も聞いた話だ。最後は平良のオバアの長靴にミヤコヒメヘビを入れる仕返しをして溜飲を下げた。そして最後にこう締める。「俺が今まで一度でもお前を殴ったことがあったか。狩俣のケンショウだったらこうはいかねえぞ。俺がどれだけ優しいか」僕は素直にそうですね、と応える。砂川のオジイはまだ無然とした表情だけれど、言いたいことを言ったからか、いくぶんすつきりしてもいる。僕はいいことをしたような気分になる。僕は砂川のオジイが嫌いではない。その日の僕たちは八重干瀬やびしを担当することになった。八重干瀬も島の大事な観光資源で、僕たちにとっても重要な清掃場所のひとつである。僕と砂川のオジイは観光客たちとっしよにボートに乗り込み、八重干瀬に向かった。砂川のオジイはいつも舳先にむつつりと座る。僕は後部で観光客の会話を聞くのが好

きだ。今日の客は女子大生らしき四人組で、
ダイビングのインストラクターに彼女はいる
のかなどと訊ねている。開放的な気分なのか
彼女たちの口は軽やかで、インストラクター
は慣れた様子でそれをいなしていた。右舷で
トビウオが飛んだ。シャッターチャンスです
よといわんばかりに、長い間ボートの横を滑
空する。彼女たちは歓声をあげ、トビウオに
カメラを向けた。もちろん口からは黒い塊を
吐き出している。僕は彼女たちの邪魔になら
ないよう席を移った。写るわけはないのだけ
れど長年の習慣みたいなものだ。それに万が
一写るようなことがあっても、風で乱れた髪
のままではきつと悔いが残る。僕はまだそう
いうお年頃なのだ。目的付近に到着するとボ
ートは錨を下ろした。近くにはすでに二艘のボ
ートが停泊していた。波は穏やかで海面は青
く透き通り、ボートはまるで宙に浮かんで
いるように見える。インストラクターが四人
組にレギュレーター

ターの説明をはじめた。
「壮介、お前は向こうから回れ」
砂川のオジイが東側を指さした。僕がうな
ずくのを見ると、すでに準備を終えていたオ
ジイは海にするりと飛び込んだ。水しぶきは
まったく立たない。飛び込むのがうまいわけ
ではなく、僕たちは小魚よりもこの世界に干
渉することができないのだ。
すぐ僕も海に飛び込んだ。海の中は地上
とはまるで違う。たぶん光の進み方が、と
うことは時間の進み方が違うのだろう。白い
光は手で触れられそうなほどそつと差し込み、
青い時間は眠気を誘うほどゆったりと流れる。
僕はまず、観光客が必ず歓声をあげる巨大
なテーブル珊瑚のまわりのストレスを拾うこ
とにした。先に到着していたボートの観光客
たちがすでにあちこちで浮いている。観光客
の吐き出す息が海面に向かってポコポコと揺
れ上っていく。いっしょに吐き出されたスト
レスは彼らの顔のまわりをいったん漂ったあ

と、静かに沈んでいった。僕はそこでも観光客の邪魔にならないように気をつけながらストレスを拾った。逆さまになってテーブル珊瑚の下も確認する。意外とそんなところにストレスは引っ掛かっているものなのだ。ある程度拾い終わると、今度は珊瑚の森に向かう。そこにもすでに観光客の姿があった。インストラクターがボードに魚の名前を書いて岩の下を指さしている。珊瑚は静脈のようにその枝を海面に向けて伸ばしている、どこか救いを求めているようにも見える。僕は珊瑚を集めていく。僕が腕を伸ばしても魚たちは逃げようとしなない。魚にも僕たちは見えないのだ。僕たちは世界を完全な傍観者として見る。ことができた。それは完成された光景だった。自然があるべき姿をそのまま僕に見せてくれる。僕の頭上を影が覆った。僕は浮いている観光客たちを見上げた。たくさんの装備をつけ

て不自然に大きくなった身体は、水中で優雅に動くことは難しそうに見える。ひとことで言えば、美しくない。この完成された世界にとつては異物だった。ここは本来、人間たちのいるべき場所ではないのだろう。人間がいなければストレスによる汚染もない。当然、僕たちだって必要ない。それなら僕がいていい場所はどこなんだろう。どこかにあるその場所を探して、僕は潮流に身を委ねて、青い時間の中をさまよう。

市街から離れた小さな集落を歩いてきた。ストレスを発散するのは観光客だけでは、当然ない。島民のストレスをきれいにするのも僕たちの仕事だ。各家庭の庭を見回り、ストレスを拾う。落ちているストレスはたいてい観光客のものより小さく、それだけに見落としたりがちなもの。砂川のオジイは、自分の庭だと思つて隅々までしつかり拾えと言ふ。もちろんそのつもりだ。

僕が庭に入っていくと、オバアたちが軒下でユンタクをしていた。話題はどこかの天ぷら屋の奥さんの口の悪さについて。どちらの方が悪いのかと思うほど痛烈に奥さんの悪口を言い合っている。脂っ気がすっかり抜けたように見えてまだ怒ることがあるのかと僕は感心しながら、サルスベリの根元からストレスを拾った。オバアたちの足元には鹿の糞み。たいな大きさのストレスが大量に落ちている。僕はそれらを手早くかき集めた。オバアたちは話している間中、口元から小さなストレスをポロポロとこぼし続けた。隣の家ではオジイたちが納屋の中に座っていた。横にあるトラクタ―のタイヤには乾きかけの土がべったりと、まるでストレスのようにはばりついていていた。今年の夏は宮古総実が何回戦まで進めるかと話している。僕はその会話に加わりたいのをぐっところえてオオタニワタリの中からストレスを拾う。オジイたちの足元を見ると、ストレスはまったく落

ちていない。男性より女性の方がストレス発散の仕方がうまいと聞くけれど、確かにそうなのだ。オジイたちも身体に気をつけて長生きしてほしいと思う。もちろんオバアにも。僕の担当エリアが終わり合流地点に来ても砂川のオジイの姿は見えなかった。いつもなら先に終えてむつつりとタバコを吸っていたりするのだけれど、めずらしいこともあるものだ。僕は手持ち無沙汰に裏のサトウキビ畑を見渡した。無意識にストレスが落ちていないか探してしまふ。これはもう職業病といつてよかった。でも僕たちの間では、サトウキビ畑やタバコ畑のストレスは拾わないという暗黙のルールがあった。範囲が広すぎるし手間もかかる。残念ながら島内の全部の畑には対応できないのだ。公平を期すためにはそうするしかない。だから僕もあまりに目につく場合以外は拾わないことにしている。もしそれだけで畑に被害が出てしまったなら、ごめんなさい、と言うしかない。砂川のオジイはまだ

だ
ろ
う
か
。
助
手
席
に
乗
り
込
む
な
り
砂
川
の
オ
ジ
イ
は
渡
口
の
浜
に
行
っ
て
く
れ
と
言
っ
た
。
「
今
か
ら
？
今
日
は
池
間
島
だ
よ
。
ま
っ
た
く
逆
じ
ゃ
な
い
か
」
「
ち
よ
っ
と
の
間
で
い
い
か
ら
、
な
」
砂
川
の
オ
ジ
イ
は
、
す
で
に
僕
が
折
れ
て
渡
口
の
浜
に
向
か
う
つ
も
り
に
な
っ
て
い
る
こ
と
を
確
信
し
た
よ
う
な
顔
を
し
て
座
っ
て
い
る
。
僕
は
仕
方
な
く
軽
ト
ラ
ッ
ク
を
走
ら
せ
た
。
「
そ
う
い
え
ば
去
年
も
こ
う
い
う
こ
と
あ
っ
た
よ
う
な
気
が
す
る
。
渡
口
の
浜
に
何
か
あ
っ
た
っ
け
？
」
伊
良
部
大
橋
を
渡
り
な
が
ら
僕
は
言
っ
た
。
で
も
め
ず
ら
し
く
砂
川
の
オ
ジ
イ
は
黙
っ
た
ま
ま
だ
っ
た
。
僕
は
去
年
の
こ
と
を
思
い
出
そ
う
と
し
た
け
れ
ど
、
結
局
、
何
も
思
い
出
せ
な
か
っ
た
。
渡
口
の
浜
に
到
着
す
る
と
、
砂
川
の
オ
ジ
イ
は
車
を
降
り
、
堤
防
の
上
か
ら
ビ
ー
チ
を
見
渡
し
た
。
僕
も
砂
川
の
オ
ジ
イ
の
隣
で
同
じ
よ
う
に
ビ
ー
チ
を
見

渡した。まだ早い時間だからか、ビーチには
親子連れが一组、中年の夫婦が一组いるだけ
だった。空は宇宙の底が透き通るほど青く、
風も穏やかで、早くも陽射しが肌を焼きはじ
めている。水平線の向こうには真っ白な入道
雲が湧き上がり、今日もうんざりするほど暑
くなる予感に満ちていた。中年の夫婦が腰あ
たりまで海に浸かり、シュノーケルマスクを
いじっていた。ちよつと貸してみろといつた
感じで男性がマスクを受け取り、両肘を張り
出すようにしてマスクのゴム部分を引っ張っ
ている。ビーチに張られたテントの前では、
子ども用の浮き輪を膨らませている父親が見
える。母親は海の写真を撮り、その足元では
まだ小さい男の子がしゃがみこんで、ヤドカ
リか何かを追いかけている。昨日は誰が担当
だったのかわからないけれど、落ちているス
トレスの数も少ない。悪くない一日のはじま
りだ。

砂川のオジイに目をやると、オジイは僕が

見ている場所とは違う場所を見つめていた。その視線を辿ると、どうやらオジイはビーチの奥の緑——おそらくモンパの木、を見ているようだった。いや、違う。緑の前で日傘をさしてたたずむ女性を見ている。女性は砂川のオジイと同年代くらいに見えた。何をすればもなく、彼女はたったひとり、ミルスベリヒユの小さな花の中に立ち、海を見つめていた。白い日傘に白いワンピース。まるでそこには色も音もないような、静かな光景だった。そして僕はようやく思い出した。確かに去年もここであの女性を見た。そのときはやはり同年代の男性もいたはずだった。ふたりで静かに海を見ていた記憶がある。

「今年は一ひとりなんだね」

僕の言葉に砂川のオジイはやはり何も応えなかつた。ただ、陽射しを憎むように顔をしかめて、その女性をじつと見つめていた。女性が目を拭ったように見えただけだけど、僕の気のせいかもしれない。

台風八号が過ぎた。幸い今回の台風は勢力も弱く、たいした被害はなかった。でも僕たちの仕事を考えると、どんな大きさの台風でもなかなかやっかかった。強風がストレスを場合によっては数キロも運んでしまう。折れた枝なんかを道路から撤去する人間の作業員たちといっしょに、僕たちも普段はたまにしか見回らないエリアまで出かける必要がある。った。もうひとつやっかいなのは、台風が来ると観光客はホテルに缶詰めになるといふこととだ。人がいるところにはストレスは吐き出されるものだから、台風が来るといふことは、ホテルの周辺でストレスが大量に増えてしまふ。うといふことになる。溜まったストレスが台風通過後もまだ残っている風で飛び、そのままではホテルがせっかく育てた花々を枯らし、てしまう。だから僕たちはホテルの周辺からストレスをきれいに拾うことにも注力しなければならぬ。

僕たちは島の南側のリゾートホテルを担当
することになった。ひさしぶりの太陽に家族
連れの笑い声がプールの方から聞こえてくる。
また新しいストレスが吐き出されていること
だろう。たくさん吐き出してくれと僕は思う。
むしろ落ちているストレスが少ないと、島を
楽しんでもらえなかったのかと申し訳ない気
持ちにさえなる。
ハイビスカスの根元から顔を上げると、ち
ょうど砂川のオジイがこちらにやってくる
ころだった。世の中の何もかもが気に入ら
ないみたいに顔をしかめて、すっかり薄くなっ
た頭頂部をタオルで拭きながら歩いてくる。
「少し休憩するか」
僕はずくと額の汗を拭い、ふたりで木
陰に座るとさっぱり茶を飲んだ。
「ああ、腰が痛え。駐車場の裏あるだろ、あ
のあたりなんか酷いもんだ。拾っても拾って
もキリがねえ」
「手伝おうか」

「いや、お前は表を続けてくれ。いいか、ひとつの花も枯らすんじゃないぞ」
とわかってるよ、と僕は応える。海の方から吹いてくる風が首元を撫でた。僕は身体の芯を抜かれたように息を吐いてヤラウギーに寄りかかった。それで思い出した。
「前から気になってたんだけどさ」僕は砂川のオジイに訊いてみる。「人間のストレスを俺たちが拾ってるわけでしょ。じゃあ俺たちのストレスは誰が拾ってるんだろう。やっぱり俺たちには見えないけど、そういう存在がちやんといるのかな」
「面倒くせえこと考えやがるなあ」オジイは苦笑した。「壮介はいてほしいのか？」
「そうだね。いてほしいとは思わない。俺たちの存在は島にどんな影響も与えないんだから、俺たちのストレスだって何の影響もないのかもしれない。それなら俺たちのストレスを拾う必要なんてないわけだよ。でもいてほしいな。それで、いつもありがとっつて言

「俺たちは誰からも感謝されねえからな」
「感謝してほしいわけじゃないけど、誰かに
わかってるよ、ちゃんと見てるよって言われ
るとやっぱ嬉しいもんでしょ」
「そんなもん、長いこと考えもしなかったな」
オジイは頭上のヤラウギーを見上げた。「俺
も年をとるわけだ」
ヤラウギーの葉を濾して降りてくる陽射し
が顔を斑に照らし、オジイは目を細めた。
「確かに人間のストレスにも意外とそういう
声は多いな。みんな理解されたがってる。孤
独なんだよ、こんなにくさんいるのに」
僕はオジイの言葉に何かが頭の中でかたち
になっってしまった。あわてて頭を振
った。その考えは泡のように弾けて消えてく
れたけれど、きつとよくないものだった。僕
はしばらく黙って座っていた。
砂川のオジイがふいに「ほれ」と顎をガジ
ユマルに向けた。「あんな高いところにも引

っ掛かっている」

「ホントだ。後で梯子持ってくるよ」

僕はその枝を眺め、そのままなんとなく目をホテルのバルコニーに転じた。ずらりと並んだそれは僕にハチの巣を思い起こさせた。それぞれの部屋には蜂蜜ではなくストレスが満たされているのだけれど。僕は無意識のうちには右から左へと視線を動かしていた。そして「それ」を発見した。

砂川のオジイが僕の指さす方を見て、オゴエ、と声をあげた。「ありや大きいな。あんなの見たことねえ」

バルコニーにある「それ」はまだできたてでかたちを持っておらず、柵を越えてどろりと下の階に垂れ落ちているところだった。しばらく見ていると、「それ」は下の階の干しである水着をべろりと舐め、やがて自身の重さに耐えかねたように落下した。重たい音がして「それ」は芝生の上で弾け、周囲を黒く

染めた。飛び散った欠片が普通の人のストレスくらいの大きさで、本体はいったいどれくらいの大きさなのかすぐには判然としない。僕は思わず立ち上がった。ハンモックで遊んでいる小さな兄妹の横をすり抜け、その黒に近づいていった。近くでしゃがみ込むと、その黒い塊はまだぶるぶると震えていた。そして僕ははじめてその声を聞いた。意識せずとも聞こえてくる。耳で聞くというより、頭の中に直接ねじ込まれるような叫びだった。聞こえてきたのは圧倒的な絶望。悲嘆、呪詛、怨嗟とそれらを飲み込む巨大な虚無。その身体と同じ、真っ黒な声。僕はその黒い声の前に何もできずにただ立ち尽くしていた。「そういうものには関わらないことだ。俺たちにはどうすることもできないんだから」砂川のオジイの声が背後から聞こえた。でも僕は黒い声に耳を傾けていた。というよりも声は僕の意識を絡めとって離してくれなかった。

声は命の放棄をほのめかしていた。声の主は女性で、理由はわからないが人生に深く絶望して、消える前に一度来てみたかった。この島にやってきた。できればこの島で人生を終わらせてしまいたいと思っっている。僕はバルコニーを見上げた。彼女の部屋は不気味に沈黙しているように見えた。のんびりタバコを吸っている男性のいる部屋とは対照的だった。彼女はまだあの部屋にいた。だろうか。それともどこかへ出かけたのだろうか。出かけた先で美しい景色を見て、この世界はまんざらでもないと思っ直してはくれないだろうか。いくらでもストレスを吐き出してくられてかまわない。それは僕がきれいにする。だからまだ、世界には見たことのない景色があり、まだ気づいていない可能性が自分の裡にあると気づいてくれないだろうか。僕は彼女の部屋を見上げながら考える。でも砂川のオジイの言うとおりに、僕にできることなど何もない。僕ははじめて心の底から自分の存在

を恨めしく思った。

翌日僕は休日だったので、それを利用して彼女のことを探ることにした。何ができるわけでもないのはわかっているけれど、家でじっとしてなどいられなかった。僕は彼女の宿泊しているホテルに向かった。件のバルコニーの場所から部屋番号はわかっている。もうチェックアウトしてしまっていれば仕方がない。そのとき僕はきつと胸に苦い思いを感じながらも日常をやり過ぎ、そのうちこんなことがあったことをすっかり忘れてしまっただろう。でも彼女はまだチェックアウトしていなかった。僕たちの仕事はホテルの客室もその範囲に含むから、施錠されていて中に入ることもできない。細かく言うと職務規定に反するから言えないけれど、とにかく特殊な方法で入ることができる。そして僕は、仕事ではないのに彼女の部屋に入った。後でバレたら砂川のオジイに相当怒られるだろうけれど、

たぶんまあ大丈夫だろう。
部屋は一般的なツインの部屋だった。手前
のベッドの上には開いたままのスーツケース、
クローゼットの中には地味な色のシャツがか
けられていた。ローテーブルの上には飲みさ
しのさんびん茶と食べかけのオニギリが置い
てある。僕はこれまでにくさんの部屋を見
てきたけれど、彼女の部屋はあまり女性らし
さを感じない部屋だった。
想像以上に黒いストレスでいっぱいだった。
ストレスに匂いはないはずなのに、胸の悪く
なるような臭気が漂ってくるようだった。シ
ーツが乱れたままのベッドの上には水溜りのよ
うに広がる黒。それが滴り落ちて床一面に広
がっていた。それは僕が部屋の奥に向かおう
とすると、足の裏にべったりとくっついた。
そしてそれらはとてもうるさかった。やはり
僕にも聞こえるほど大きな声だった。僕はそ
の声のひとつひとつに注意深く耳を傾けた。

ある塊が言う。
自分が悪い子だからだ。みんなみたいにち
やんとできないから叩かれる。ごめんなさい。
もうしません。だから許してください。嫌い
にならないで。お願い、ママ。
別の塊が言う。
クラスメートの視線が怖い。みんなが私を
笑っている気がする。きつと何かおかしなこ
とを言ってしまったのだ。私みたいなのが輪
に入ろうとしたのがいけなかったんだ。私な
んかが、私みたいなのが。ごめんなさい。
違う塊が言う。
お前といると疲れるってどういう意味？
そんな顔されるとうんざりするんだって、ど
んな顔？鏡の前で自分の顔を眺めてみても
よくわからない。つまらなそうな暗い穴のよ
うな目が悪いのだろうか。でもこれはどうし
たらみんなみたいにキラキラと生気を帯びる
のだろう。ごめんなさい。彼に嫌な思いをさ
せてしまった。私みたいな存在が人並みの幸

せを求めたのが間違いだっただ。でもお金
は返して。やっぱりいい。お詫びのかわり。
隣の塊が言う。すみません。何度謝っただろう。でもそれ
は課長の指示だったはずだ。違うか。それを
見越して対応できなかった私が悪いんだ。で
も大きな声で怒鳴るのだけはやめてほしい。
心臓を氷の手できゅっと握られるような気が
する。また誰かに笑われた。
他の塊が言う。休日なんてなくていい。余計なことばかり
考えてしまから。もし叶うなら、今すぐお
ばあちゃんになつてしまいたい。誰からも責
められず、誰からも笑われず、どこかでひとり
り静かに暮らしたい。そして穏やかに終わり
を迎えたい。ごめんなさいは言い飽きた。
大きな塊が言う。いうるさいいうるさいいうるさい
いうるさいいうるさいいうるさいいうるさい

いうるさいいうるさいいうるさいいうるさい。
震える塊が言う。
もう私なんていなくていいよね。いなくて
も誰も困らないよね。充分がんばったよね。
だから。だからもう：：。
彼女の言葉に僕は言葉を失った。幹のよう
な太い声があり、それを補完する枝のような
エピソードを語る小さな――あくまで相対的
にだけけれど、声があつた。彼女は母親のこと
を好きにならなければと自分に言い聞かせ、
誰かに好かれたいと願う一方で誰をも疎まし
く感じていた。誰からも必要とされておらず、
誰かから浴びせられる否定的な感情は、彼女
をまるで世界のゴミ箱のように感じさせた。
彼女は今日も最期を迎えるのにふさわしい場
所を求めて、島内をレンタカーで巡っている
と声は言った。もういくつか候補は絞り込んで
であり、明日、帰りの飛行機に乗るつもりは
ない、とも。

僕は彼女が印をつけたかもしれない、とガ

イドブックを探したけれど、どこにも見当た
らなかつた。僕に彼女を探す手段はなかつた。
僕の声が届ける方法もなかつた。だから僕は
せめて部屋をきれいにしよう、まだ固まり
きつていない黒を両手でかき集め、バルコニ
ーから外へ何度も捨てた。僕の腕は肘の上ま
で黒く粘つき、僕の着ていたシャツは上の方
まで真っ黒に染まった。それでも僕はかまわ
なかつた。こんな昏い部屋で過ごす誰かなど
想像したくもなかつた。
「いい加減にしろよ。こんなところばかり走り
やがって」
砂川のオジイは苛立つ声をあげた。オジイ
は態度はぶつきらぼうだけれど仕事はきちん
とするタイプだから我慢できなかつたのだろ
う。今日、僕たちは伊良部に最近できたば
かりのヴィラを担当する予定だった。荷台に
は大量のストレスを燃やした灰と散水機が積
んであり、植えられたばかりの木や花をそれ

で手入れする。でも僕はそこへは向かわず、島内の誰からも忘れられたような場所ばかり選んで軽トラックを走らせていた。「理由を言え」オジイはもつともなことを言った。でも僕は答えられなかった。言葉にすると怖れていることが実現してしまうような気がした。かわりに、「この間、渡口の浜行っただしよ。だから今日は俺に付き合っただよ。」お前は朝からずっとじゃないか。どうするんだよ、今日の仕事は。しかもこんな辺鄙なところばかり。砂川のオジイは口の中でぶつぶつとまだ何か言っていたけれど、僕はそれも無視した。しばらく走り、何もない道に停まっているレンタカーを見つけると、僕は軽トラックを停め、レンタカーの運転席を覗いた。観光客が地図を広げ、どこへ行こうか相談しているよ

うだった。ふたり連れだ。彼女ではない。僕はほっとしてアクセルを踏んだ。誰か探してるのか。だとしたら、そんな無理だ。いくら小さな島だといっても、でたらめに走ってどうにかなるようなもんじゃねえよ。」

そんなことはわかっていた。それにもし彼女を見つけない。僕には、僕にはどうすることもできない。何をしたいのかもわからない。そもそも彼女の顔も知らない。ただ、彼女には帰りの飛行機に乗ってもらいたい。帰った先の現実が辛いものだとしても、どうにかやりようはあるのではないか。何も自ら命を絶たなくていいではないか。この島はその辛さをいっとき忘れるための場所だ。人間が、ダイビングのガイドが、宮古そばを作るオバアがいる。誰もがこの島にいる間はずっと笑顔でいてほしいと願っている。そう

いった樂園は彼女のような人にこそ必要なの

ではないか。それともこんな考えは彼女の辛さを本当に理解していない僕の甘さの証左でしかないのだろうか。僕は誰も乗っていないレンタカーを見つけた。あたりを見回し女性の姿を探したけれど見つからない。近くにアダンの枝が張り出した隘路を見つければ、その奥に進んでみた。彼女にいてほしいのかいてほしくないのかは自分でもわからなかった。その先は隠れ家的なビーチになっでいて、若いカップルが足だけ海に入っで遊んでいるだけだった。僕は安堵の息を吐いた。そしてもし彼女を見つけた場合の、それが手遅れかもしれない可能性を思い、慌てて頭を振ってその考えを消し去った。ては車を降り、そのたびに失望と安堵の入り混じった感情を持って余し、少しずつ重くなっでいく身体で再び車に乗り込んだ。砂川のオジイはもう何も言わず、助手席で腕を組んだ。

まま、眠ってしまったのかずっと目を閉じていた。気がつけば西の雲は茜色を帯びはじめていた。僕は舌打ちをしてハンドルを乱暴に叩いた。彼女はもう手の届かない場所へ行ってしまった。たのだろうか。僕は全身から力が抜け、シートにぐったりともたれた。だいたい顔も知らない彼女を見つけないとすること自体間違っていないのだ。何もできないくせに、ただの自己満足のために一日を費やしただけだったの。だ。砂川のオジイにも迷惑をかけた。僕は助手席を見た。オジイと目が合った。「もう諦めたのか」オジイは僕の目を覗き込むように見ていた。「俺はお前よりほんの少しばかり長生きしてるからな、諦めについてばかりよつと詳しい。いいか、諦めるとそれは癖になる。癖になると人間が卑屈になる。お前はそんな人生を送りたいのか」僕には弾かれたように背を伸ばした。弛緩していた僕の中の芯のようなもの急速に力を

漲らせていくのがわかった。考えよう、と僕は思った。もし僕が彼女の立場なら、そして今もまだ生きているとしたら、どんな場所をこの世の最後に見たいだろうか。傾きはじめた陽が僕の目の前でちらちらと踊った。そして僕は思い至った。きれいな夕陽が見える高台がある。そこはいちおう古びた手すりです。まれてはいるけれど、その気になれば簡単に乗り越えられる。そしてその先は断崖になつていて、眼下には吸い込まれそうな宮古ブルーの海が広がっている。地元の間人が行くような場所でもなければ、ガイドブックにも載っていないから観光客も来ない。彼女を思いとどまらせる人目もないはずだ。彼女がその場所を選ぶ可能性は充分ある。空の青は遠のいてそこだ、と僕は思った。空の青は遠のいて褪せはじめた。ここから高台まで急いでも三十分はかかる。僕はハンドルを握り直すとき、思い切りアクセルを踏んだ。砂川のオジイがシートに押しつけられて不平そうなお息を吐い

た。荷台で灰の入った箱が滑る音が聞こえた。
高台の下の駐車場にはレンタカーが一台停
まっていた。僕はそれを見た瞬間、あばらの
中で心臓がドクンと跳ねたのがわかった。駐
車場のラインも無視して乱暴に車を停めると、
僕は階段を駆け上がった。そしてついには、彼
女を見つけた。それが彼女だと、なぜか僕に
は確信できた。彼女はまだ手すりのこちら側で、腰あたり
の高さの手すりに手を置いて立っていた。風
が揺らす髪を手で軽くおさえている。その姿
は夕陽の中にあって、とても美しかった。こ
れからすべてを捨てる覚悟が滲むような、儂
く凄惨な美しさだった。僕は目的も忘れて彼
女の流れる髪を、揺れるスカートを茫洋と見
つめていた。彼女がつま先立ちしていた踵をとんと落と
した。それから手すりの向こう側を見つめ、
ひとつつうなずいた。僕は我に返った。見惚れ

「ダメだ！」

僕が叫んだ。彼女は振り返った。でもそれは僕の声に反応したからではなく、誰かに見咎められないように人の姿を確認しただけのようだった。僕は彼女に駆け寄った。彼女の肩を掴もうとした。誰かの温もりが伝われば、誰かの言葉が伝われば、彼女はこの世界にいてもいいと考えなおすかもしれない。でも僕の手は虚しく空を切り、僕の言葉が彼女の耳に届くことはなかった。

彼女がゆっくりと手すりをまたいだ。ゴツゴツとした岩場に足をとられないよう、注意して足を下ろす。

「ダメだ、戻って」

僕はもう一度叫んだ。彼女は岩に張りつくように伸びているミルスベリヒユの小さな白い花を避け、よろけながら岩場を進んでいく。

どうすればいい？ 僕に何ができる？

僕は階段を駆け下りた。軽トラックに戻り、

荷台から灰の入った箱を下ろした。
「オジイ、散水機！」僕は叫んだ。
砂川のオジイは助手席でゆっくりと身体を
起こした。「なんだって？」
「いいから早く。散水機」
「こんなところで水撒いたってしょうがねえ
だろうに」
オジイは文句を言いながらも、僕の様子に
気圧されたのか、驚くほど素早く車を降りる
と、手慣れた様子で散水機を背負った。「で、
どこに行きやいいい？」
「上。ついてきて」
僕たちは階段を駆け上がった。僕は灰が上
までぎっしり詰まった重たい箱を持っている
のも気にならなかつた。砂川のオジイにして
も、今日はまだ一度も撒いていない、だから
タンクには水のたっぷり入った散水機を背負
っているとは思えない速さで後ろをついてき
た。

僕が高台に戻ったとき、彼女はまだ崖の上

にいた。僕は安堵する暇もなく手すりを乗り越えた。越えた。探してたのはこの人か」

砂川のオジイは事態を飲み込んだのか、いつもの軽口も叩かず僕に続いて手すりを越えた。

彼女が崖の際まであと数歩というところで立ち止っていた。胸の前で祈るようにかたく手を組み合わせ、閉じた睫毛は細かく震えていた。顔色はオレンジ色の光に照らされていてなお、色を失って紙のような蒼白に見えた。

口の裡で何かをずっとつぶやいている。

「怖いんだろ？ だったらやめよう、こんなこと」

僕は彼女に話しかけながら、ポケットから出した花の種を彼女の周りにでたらめにばら撒いた。それからその上に灰をあるだけ全部振りかけた。

「オジイ、水。たっぷりお願い」

「まかせとけ」

砂川のオジイはいたずらを
する子どももみた
いな顔で散水機を操作して、
灰の上に水を撒
きはじめた。染み込んだ水が
薄い灰色を濃い
黒に染めていく。僕は祈るよ
うな気持ちでそ
れを見つめた。
変化は突然だった。灰の下
から芽吹いたた
くさんの小さな葉があつと
言う間に膝丈に、
それからすぐに腰のあたり
まで成長した。そ
して子どもの掌くらいの花が
次々と咲きはじ
めた。ひとつひとつのポンと
弾ける音が聞こ
えてくるようになった。彼女
が目を開けている
間に、彼女のまわりを大量
のアラマンダの黄
が、ハイビスカスの赤が、
ブルーゲンベリアの
紫が、月桃のピンクが、
彼女を取り囲んだ。
花の香りに気づいたのか、
彼女はふっと目を
開けた。そして一変した光
景に息を呑んだ。
彼女がゆっくりと振り返
った。そして自分が
何かから守られるように
大量の花に囲まれ、
これ以上進むこともでき
ないことを知った。
彼女の驚く表情はまだ硬
かったけれど、頬に

赤みが戻ってくるのがわかった。唇が何かを
発する前のように震えていた。僕にはこの花
たちが彼女の深い部分をしっかりと握ったよう
に見えた。彼女はやがんでハイビスカスの花に触れ
た。
「なんで」
彼女は僕にだけ聞こえるくらい小さな声
で言った。
「理由なんて何だっていいよ」僕は答えた。
「それより大事なことは、この花はあなたの
ためだけに咲いたってことだよ」
彼女に聞こえていなくてもかまわなかった。
でも彼女にはわかってほしかった。世界はあ
なたを忘れてなどいないのだ。そして、生き
ていれば、こんなささやかなだけけれど本物の奇
跡に出会えるかもしれないのだ。もしかした
らこれまでの彼女の人生にも小さな奇跡が起
きていたのかもしれない。でもそれが見えて
いなかったただけなのだ。だからこれからは見

逃さないうようにしっかりと目を開いて生きて
いってほしい。そうすればこんな花をまた見
つけられるだろう。彼女が自分の行く手を遮る
ように咲いた花
たちを不思議そうに眺め、もう一度「なんで」
と言った。そのまま短くない時間が過ぎた。
茜の雲もかたちを変えた。気づけば彼女の頬
を涙が伝っていた。彼女の顎の先に留まる滴
は、世界を逆さまに閉じ込め、夕陽を受けて
美しく輝いた。涙は途中から嗚咽に変わった。
その声はやがて高く深く悲痛になっていった。
すべてを曝け出して身体を振り絞るような彼
女の泣き声は、誰もいない崖の上に響き、風
に乗って空へと消えていった。彼女が顔を覆
う両手の隙間からは、黒いストレスがドロド
ロと流れ落ちていった。最初のうちはいかに
も粘り気の強そうなドロツとしたストレスは
やがて、サラサラとした色も薄いストレスに
変わっていった。そうやって全部吐き出して
しまえばいい、と僕は思った。もう部屋を埋

め尽くすほどのストレスをその身体に貯め込
むことなんてやめるべきだ。そんな状態では
自分を肯定的に捉えることも難しくなっ
てしまふ。笑顔の意味だってわからなくなっ
てしまふだろう。僕には彼女の辛さはわか
らないけれど、他人の無責任な発言かもし
れないけれども、それでも彼女には笑って生
きていってほしい。誰が何と言おうと、そ
の権利が彼女には絶対にある。隙間に入っ
てしまっただけの拾いにくいけれど、そ
んなことは気にしないでいい。それが僕た
ちの仕事なのだ。細かい棒を使って器用に
掻き出すところなんて、見せたやりたくら
いだ。僕の頭の中で何かはまるカチっとい
う音が聞こえたような気がした。僕はそこ
ではじめて僕たちの存在する理由を本当の
意味で理解した。それは身体の内から震え
る興奮をと

大声で叫びたいような、とにかくはじめての
感覚だった。僕はたまらず言葉になる前の意
味のない音を叫んだ。
「うるせえな」
砂川のオジイが笑った。僕も笑った。よく
わからないけれど涙も滲んだ。
「ここにサガリバナもあれば完璧だったんだ
けどな」
オジイはそれでも満足そうに花々を見回し
た。
「これからはマンゴーとドラゴンフルーツの
種も持ち歩こうかな。そしたら食べてもらえ
るし」
もつと食べやすaimonにしたらどうだ、と
砂川のオジイはまた笑った。
風に藍色が流れ込みはじめていた。次第に
花叢と彼女の輪郭が曖昧に溶けていった。彼
女の泣き声も遠ざかっていった。花たちは静
かに彼女を見守っている。海の上をクロサギ
が音もなく迂回していった。水平線のあたりで

海と空が互いを侵食しあつて滲んでいる。空の低いところに月が濡れたような姿を現した。僕は誰も見ていないこの光景を、いつまでも覚えておこうと思つた。

最後に。

その花たちは今もその場所に咲いている。興味があるなら探してみしてほしい。夕陽のきれいな高台だ。だけれど、くれぐれも手すりはないから乗り越えないようにね。

(了)